書評

中山俊宏著
『アメリカン・イデオロギー――保守主義運動と政治的分断』
（勁草書房、2013年）
『介入するアメリカ――理念国家の世界観』
（勁草書房、2013年）

中　野　博　文

1. 革命なき国家における革命的変化

21世紀初頭の13年はアメリカにとってどのような時代であったのか。初の黒人大統領B・オバマが2期目の任期を務めているとはいえ、それは急進化した保守の影響が強まり、冷戦後の新たな対外的コミットメントをめぐって試行錯誤が繰り返された時代として、人々に記憶されるであろう。

ここで取り上げる2冊は、そうした時代を描いた好著である。両著に収められた文章は、中山俊宏氏が2000年以降に発表した論文をもとに、それらを加筆、修正したものである。それぞれの書の「はじめに」を見ると、『介入するアメリカ』に収められた論文は「1990年代後半以降、アメリカが対外的にとったアクションに反応するかたち」で書かれ、また『アメリカン・イデオロギー』もその多くが「アメリカの保守主義運動がその攻勢を強め、政治的隆盛をきわめていた時期」に書かれたのであった（両著とも、i頁。以下、両書の該当頁への言及は括弧内に頁数のみ示す）。

流動的な情勢下、現状分析として発表した文章をまとめて世に問うのは冒険である。しかも、21世紀前半は従来のアメリカ理解では把握することの困難な状況が出現した時期であった。

冷戦期に先進各国の大学でアメリカ研究が行われるようになったとき、アメリカは自由主義に対抗する保守主義を欠いた特異な文化を持ち、自由と民主主義の防衛と発展を唱えて過剰なまでに他国に介入していく国家であった。そうしたアメリカを理解する手引きとされたのは、アメリカ特有の国民文化の思想史的考察であった。1950年代、L・ハーツは民主主義を獲得するための革命を経験することがなかった点にアメリカ社会の特殊性を見て取ったトクヴィルの議論を用いて、他国の文化に対する感受性を欠いたまま、人権抑圧と対外介入を続けるアメリカ自由主義の有様を見事に描いた。それから半世紀がたった21世紀、アメリカは冷戦期の自由主義体制を根本から否定しようする保守主義に翻弄され、内政外交で動揺を繰り返す国家になっている。

この変化は自由主義の信条を国民すべてが共有するというハーツに代表される古典的なアメリカ理解では捉えがたいものであり、いささか誇張していえば、革命的とも呼ぶべき構造的な転換が20世紀後半に起こったことを指し示すものであった。そうした変化の内実を探り、内政における保守主義運動の台頭を論じたのが『アメリカン・イデオロギー』、

そして外交における冷戦後の介入主義について分析したのが『介入するアメリカ』である。

この二著に共通するのは、中山氏特有の政治文化への接近である。政治が権力に支配された世界である以上、権力の論理にしたがって一定程度まで政治の説明は可能である。しかし、それだけでは、どうしても論理的には説明がつかない部分が必ず残っていく。それは文化的要因としか表現できない政治の非論理的要素である。それを中山氏はこの二著で当事者であるアメリカ人自身の言葉で再現することを試みている。

この点、『介入するアメリカ』にある興味深い文章を引くと、「アメリカの対外行動を説明せんと個々の事実を積み上げていっても、必ずそれでは説明できない「余剰部分」が残ってしまう。…この「余剰部分」を「理念外交」としてわかりやすくパッケージ化するのではなく、また「非合理的な衝動」として切り捨てるのでもなく、いわば言葉を用いてそれを解剖していくことが、本書に収められた論文に共通する問題意識、いや、というよりも筆者が問題に取り組もうとするときの基本姿勢だったように思う」と述べられている（ii-iii）。

『アメリカン・イデオロギー』でも筆者は「「進歩」を体制イデオロギーとして内面化するアメリカには、論理的には保守主義は存在しえないはずである。しかし、存立しえないはずのところにそれが存在しているという矛盾に着目すれば、「アメリカン・イデオロギー」の一端を照射することができるのではないか」（i）と述べ、筆者自身の問題関心が「保守主義運動を通して見たアメリカ」にあるとしている（ii）。

現状分析のため、その時々に発表された中山氏の論文を読者が単著として手にしても、考察の手堅さを感じることができるのは、こうしたアメリカの国民意識に注目する文化的アプローチを著者が取っていることが関係しているように思われる。それはL・ハーツやR・ホフスタッター以来のアメリカ研究の古典的手法であるとともに、先進国の中でますます特異な容貌をとるようになった、この国の特徴を浮かび上がらせる比較政治の方法でもある。

2. 保守主義時代としての21世紀『アメリカン・イデオロギー』

それではそれぞれの著作の内容を見ていこう。『アメリカン・イデオロギー』が扱うのは「保守主義が運動として産声を上げた1950年代半ばから、2008年にオバマ政権が誕生し、それに反応するかたちでティーパーティー運動がアメリカを揺るがした2010年頃までの時期」（ii）である。

その内容を見ると、「はじめに」と序章の後、3部10章を置くことによって構成されている。第I部は「保守主義運動の来歴と台頭」、第II部は「保守系インフラの役割」、第III部は「オバマ時代における変化」と題されている。

序章「「遍在するアメリカ」をどう対象化するか」は筆者のアメリカ研究に対する姿勢を明らかにした文章である。相互依存の深化によって我が国に数多く存在するようになった「アメリカ・ウォッチャー」を論じて、著者は「大きな変化のうねりに直面したとき、ウォッチャーたちは事情通であるからこそ、逆に既存のネットワークや知の体系に依存してしまい、変化の本質をつい見落としてしまうことがある。また研究者も、あえて歴史が大きく展開するという物語を拒否して、目の前の個別の事象をストイックに考察しようとする傾向がなくはない」（12）と述べる。こうした陥穽を避けるためには、多面的なアメリカ理解が重要であるとして、それには「アメリカという国と距離感を保ちつつ、充分な共感をもっ

て、それを総体として語る言葉を見つけていかなければならないだろう。アメリカ研究に課せられた最大の課題は、個別と普遍の調和をどの地点に見いだすか、その一点にかかっているといえるだろう」(13) としている。

次に本論を見ると、まず第I部で保守興隆の史的輪郭が描き出されている。第1章「アメリカにおける保守とリベラル」では1960年代に明確になったイデオロギー対立が深まって、レーガン期に保守優位の時代が始まったことが示される。第2章「保守主義台頭の力学」と第3章「保守主義運動の持久力とその限界」では保守派の台頭を促した社会運動について、リベラル派打倒のために保守派が集まり、アイディア、人のネットワーク、資金が戦略的に動員されていった過程が明らかにされる。第II部はそうした保守の動員を支えた組織的基盤について個別に分析した章である。第4章「保守系シンクタンクとアイディアの戦略的動員」、第5章「攻勢をかける保守系メディア」、第6章「宗教勢力の政治活動を支えるインフラ」が置かれている。

第III部は2008年大統領選挙におけるオバマ勝利と前後して保守主義に起こった変化を考察した諸章である。まず第7章「現象としてのオバマ」で2008年選挙の争点とオバマの選挙勝利の要因を示した後、第8章「ブッシュ政権後のアメリカ保守主義」では2006年と2008年の選挙の大敗を受けて保守主義運動の内部で起こった保守主義の在り方をめぐる論争が描かれる。第9章「変貌をとげる福音派」は福音派の保守派離れとも見える現象を追い、第10章「共和党とティーパーティー運動」は、オバマ政権を苦境に追い込んだティーパーティー運動を、保守主義の大同団結を実現した運動組織が衰退した後に登場した新しい保守として論じている。

3. ポスト冷戦期のアメリカ外交『介入するアメリカ』

次に『介入するアメリカ』に移ると、この書も三部構成である。まず序章「21世紀もアメリカの世紀か」では、1990年代の単極支配の状況がG・W・ブッシュ政権のアメリカの国益を最優先する単独行動主義を生み、テロとの戦いでの過剰な対外的コミットメントを経過して、オバマ政権の新しい外交へと変化していく軌跡が概観される。

続く第I部以降の各部は、クリントン政権からオバマ政権まで、それぞれの時期の外交を扱ったものである。第I部「介入と孤立のはざまで」は1999年のコソヴォ戦争から2001年同時多発テロまでの介入主義的外交の発展を追ったもので、第1章「アメリカの理念外交とコソヴォ戦争」ではエスニック・クレンジングという言説に動かされて、アメリカが「人道的戦争」に突入していく過程が分析される。第2章「リベラル・ホークとは何か」では、ヴェトナム戦争に反対し湾岸戦争でも反戦の立場を貫いていたリベラル派の内部で、秩序回復の道義性を重視して他国への軍事干渉に積極的な人々が現れるようになった状況と、そうした介入主義的リベラル派の活動が明らかにされる。こうしたリベラル派は多国間協調を支持する人々であったが、彼らと敵対する保守派の外交的態度は単独主義によって特徴付けられる。それを扱ったのが第3章「アメリカにおける国連不信と保守派の言説」である。

第II部「ブッシュ外交の波紋」はブッシュ政権期の外交を論じた諸章である。第4章「アメリカの覇権的正義と米欧対立」はイラクの体制転覆をめぐって生じた米欧間の亀裂をめぐり、両者の外交文化の相違が噴出した状況を論じている。第5章「イラク戦争の脱争点

化とブッシュ政権の言説戦略」は2006年中間選挙で敗北したにもかかわらず、ブッシュ政権がイラクへの米軍増派に成功したことを取り上げて、この戦争は厭戦気分を生み出したものの、ヴェトナム戦争のような反戦意識を生みだすことはなかったこと、2008年選挙でも戦争か反戦かの選択が大統領選びの争点にならなかったことを明らかにしている。第6章「リベラルな帝国是認論」は第2章で描かれたリベラル・ホークの一人であるM・イグナティエフの帝国支持を題材にアメリカの外交論調を追ったもの、第7章「中国を見るアメリカの視線」は世論調査をもとに1940年代から21世紀のブッシュ政権期までのアメリカの中国認識の変化を論じたものである。なお、ブッシュ政権以後の中国認識については、第9章「「台頭する中国」をアメリカはどのように対象化しているか」で論じられている。

第III部「オバマ外交の射程」はブッシュ外交からオバマ外交への変化を扱った諸章である。第8章「「アメリカ後の世界」におけるアメリカ外交」はオバマ政権の外交がブッシュ時代の政策の多くを引き継ぎながらも、実際には全く異なる世界観に基づいて外交運営を行っていることを明らかにした章である。中山氏によれば、オバマは「「アメリカだけではコントロールできない問題」に直面しつつ、さらに外部のない「(否応なしに) つながってしまった世界」のなかで、問題をプラグマティックに解決していくためには、問題ごとに形成されるさまざまな連合 (コアリッション) を柔軟に活用していく以外にはない」(207) という立場を取っているという。著者は、対テロ戦争の実行などでアメリカの力で単独主義的に世界を安定させようとしたブッシュ外交と同じ行動をとることはあっても、オバマの態度は「開明的な国際主義」に基づいており、それは国民のなかにある「孤立主義的な心性」とは対極にあると述べている (208)。

こうしたオバマの多国間主義については、第10章「変わる世界とアメリカの東アジア外交」で北朝鮮政策を事例に分析されている。終章「「アメリカの衰退」と日米関係」は、21世紀における日米同盟について、中国が大国として台頭するなか、同盟の理念的根拠と同盟を揺るがす要因を論じたものである。

4. 中山氏が示した21世紀アメリカの姿　開明的国際主義とその敵

二つの著作で中山氏の描いた21世紀アメリカとはどのような世界か、ここでまとめてみよう。オバマ政権のイニシアティヴは、「もはや世界をアメリカに似せて作り変えようとするのではなく、…アメリカをグローバル化することを目指したものだ。アメリカが実際にどこまで見通して、自国をこのような方向に導いていこうとする人物を自分たちの大統領として選んだのかはわからない。おそらく彼ら自身にはそのような自覚はないだろう。…しかし、バラク・オバマ大統領の誕生が、…アメリカが変わろうとしている方向性を示唆しているものであるとしたなら、それは「21世紀はアメリカの世紀か」という問いかけそれ自体がもはや意味を持たなくなっている状況を象徴的に示しているのかもしれない」(『介入するアメリカ』、25-26頁) と著者は述べている。

この文章に先立って、中山氏は「アメリカの世紀」について、H・ルースに言及しながら説明している。ルースにとってアメリカは「これまで台頭しては没落していった「普通の帝国」」とは異なる「人類を良き方向に導いていく使命」(3) を持った国であったことを

記した後、中山氏はそうした考えからは「単に空間的に広がっていくのではなく、人々の生活様式にまで介入していくまったく新しい介入主義」が生まれたこと、またそうした介入主義は「第二次世界大戦後にアメリカが世界秩序を維持するレジームを築き上げ、世界経済を牽引し、技術革新の震源地であり、それに加えて…アメリカン・カルチャーの影響力」の強さを考えると、かなりの程度まで成功したと言ってよいことを指摘している（4）。

中山氏が21世紀をアメリカの世紀かどうかを問う意味が喪失しているかもしれないと示唆したのは、オバマの「開明的な国際主義」が、「アメリカの世紀」を目指した介入を否定しているように見えるためである。中山氏はR・ハースとF・ザカリアがそれぞれ別の論文で展開したアメリカ衰退論に注意を促す。彼らは世界政治で中国などの新興大国や、国際機構やNPOなど国家以外のアクターが影響力を拡大しことを自国の直接の脅威とは必ずしも見なしていない。アメリカは相対的に国力が低下したと言っても、依然として自国がかつて構築した世界システムの中心であることに変わりはなく、しかも台頭した他のアクターもシステム内で行動している以上、このシステム内で安定した関係を築けば十分と説いているのである。中山氏は、こうした発想は、「アメリカの世紀」が世界をアメリカ化することを狙ったのと対照的に、アメリカを世界に順応させること、すなわちアメリカのグローバル化を目指したものであると論じている（20-22）。

『介入するアメリカ』におけるこうした「開明的な国際主義」の展開を考える上で不可欠なのが、『アメリカン・イデオロギー』のテーマとなっている人々、すなわちオバマを不倶戴天の敵とする保守主義者の考察である。中山氏はオバマ政権には「個々の政策の合理性をしっかりと説きさえすれば、国民の支持を取りつけられるとの自信があった」ように見えるが、「その自信は、アメリカ国民の思考を根深いところで規定している原風景的な感覚に対する感性を鈍らせてしまうことになりはしなかったか」と論じている（『アメリカン・イデオロギー』、37-38）。「この原風景的な感覚とは、保守主義の方向に大きく傾斜しつつも、必ずしも党派的な感情ではなく、むしろ生活感覚に根ざした連邦政府に対する不信感」であり、「リベラル派は、しばしばこの感覚を「反知性主義」として退け、克服されるべき退行的感覚と見なしてきた」が、「そうするたびに、リベラル派はこの感覚のしぶとさをいやというほど思い知らされてきた」（38）と著者は言う。

中山氏が『アメリカン・イデオロギー』で行っている保守主義についての考察は、オバマを苦しめているアメリカ国民の政治不信が、いかに一部の人々によって運動へと組織化され、政策に影響を与えるようになったのかを解明したものである。この点、アメリカをグローバル化しようとするオバマの前に立ちふさがったティーパーティー運動についての記述は興味深い。

「保守主義運動が「政治運動」になりえたのは、「衝動」を政治的言語に変換し、それを権力奪取のロジックとして展開していったからであった。しかし、ティーパーティー運動はむき出しのままの「衝動」にすぎない。…衝動が衝動のまま政治的回路に吸い上げられ、中心が不在のまま、国政レベルに大きな影響を及ぼしてしまった」（242）。衝動がロジックに変換されなくなったのは、変換装置であった回路が権力の一部として人々から忌避されはじめたこと（239）、そして、ツイッターなどのソーシャル・メディアが普及することで、人々の不満がつながっていき「いかなるフィルタリングも経ずに、衝動の集合体が形成」されたこと（245）があると指摘される。

大統領オバマは「アメリカという国は、振り返ってみて存在するものではなく、つねに未完の存在であり、将来に実現すべき存在として意識」(176) して、権力のスマートな運用に徹しているのに対して、ティーパーティー運動はアメリカの原風景をやみくもに求めて、オバマに対して自らの感情を爆発させているというのが、著者の見立てである。『介入するアメリカ』で述べられている国家エリートの世界観を、『アメリカン・イデオロギー』で考察された国民衝動の組織化とあわせて考えれば、21世紀のアメリカがよく理解できる。この2冊を同時に読まれるように強く勧める所以である。

5. 変わりゆくアメリカ研究の地平と変わることのない問い

『介入するアメリカ』はヴェトナム戦争の経験から反戦の党として振る舞ってきた民主党が1990年代に大きく変わったことについて、民主党のリベラル・ホークがG・W・ブッシュ政権の単独主義的介入を推進した人々と通じる道徳志向があることを示して、見事に描いた。『アメリカン・イデオロギー』は、内部に深刻な亀裂を抱えた保守派を融合させているシンクタンクやメディア、利益団体などに注目し、制度論的な立場からその変化を追った作品である。リベラル派の変貌や制度発展を視野に入れることで、二大政党間のイデオロギー対立だけでは捉えられない21世紀のアメリカ像を提示することに著者は成功している。

斬新なアメリカ像を感じる一方、読了した後、どうしようもない既視感に評者は襲われた。考察対象が自由主義から保守主義へと変化し、分析手法も単なる言説分析ではなく制度の視点が入っているものの、その内容はコンセンサス史学の現状分析と見紛うばかりである。先に指摘したとおり、中山氏はL・ハーツやR・ホフスタッターが築いた政治文化研究の手法を引き継いでいるから、ある意味でこれは当然かもしれない。ハーツたちは核戦争の時代を生き延びるには、アメリカは古き伝統の世界から脱却せねばならないと説き、近代化に抵抗する人々の頑迷さを激しく批判した。彼らがアメリカに保守主義がないと論じた背景には、秩序維持を優先して新しい価値観を進んで受け入れていくヨーロッパの保守主義がアメリカに存在しないのを嘆いたことがあった。反共のための聖戦を唱えていた反動勢力と、そうした反動とモラリズムを共有するリベラル派に耐えきれなかったのである。

オバマでさえ道徳主義に拘束され、現在の共和党がますます「保守化」しているのを見ると、アメリカはやはり他の先進国とは異なる例外的国家であるとの思いは強くなる。半世紀前、ハーツたちは、アメリカの理想よりも多様な価値の共存を優先する時代がアメリカに来るのかと読者に問いかけたが、この問いから自由になる日は、果たして、いつか来るのであろうか。アメリカ研究の変わらぬ問いがここにある。